

メデイア人脈を考察する

——戦中・戦後の三つの「事件」から

飯田 いいた 和郎 かずお
(一般社団法人アジア調査会理事)

第1章 言論統制下 掲載された軍部批判記事

第2節 吉岡文六の原点と時代の背景

人吉城址を背景に、軽やかな水音が岸辺に響く。だが、日本三大急流の一つ、球磨川は時に流域に住む人々とその財産を襲う。気象庁が「令和2(2020)年7月豪雨」と名付けた大雨によって、熊本県人吉市内を流れる球磨川がはん濫、市街地の多くが水没した。市中心部を歩くと、きれいに整地された空き地が点在する。水害で損壊・崩壊

し、撤去した店舗や住宅の跡地だ。県庁のある熊本市や鹿児島県を結ぶJR肥薩線は今も復旧していない。傷跡は残ったたまたまだ。

その市中心部を望む高台に、東林寺はある。黄檗宗の南九州地方本山である、この寺の一角に、吉岡文六の墓は佇む。人吉は吉岡の生まれ故郷だ。墓石に彫られた吉岡の戒名「賢徳院桃岳文英居士」は、吉岡が「桃」の花咲く春3月に他界し、「賢」く「徳」のあるリーダー、そして「文」を書くことに「英」でたジャーナリストだった生涯を記録

第2回



【図6】東林寺にある吉岡文六の墓＝論者撮影

している。

東林寺の第23代住職、森無禪は「自分も新聞記者だった」という年配の方々がごくごくたまに、吉岡の墓を訪ねてくると言う。東條英機を痛烈批判した竹槍事件の記事が『毎日新聞』紙上に掲載されてから80年が経過する。吉岡文六を直接知らずとも、同じ道を志した者たちの中で、その存在は今日も生き続けているのかもしれない。森は「吉岡の墓を訪れる縁者はだれもない」と話す。ただ、地元の郷土史研究会「人吉・球磨の偉人に学ぶ会」事務局長の吉岡弘晴らによると、学ぶ会のメンバーらが定期的に墓の回り

の草をむしり、花を手向ける。墓前に酒を好んだ吉岡のため、地に元の球磨焼酎を供えるという。

吉岡文六は、竹槍事件と呼ばれる記事掲載から2年後、敗戦の翌1946年3月1日、46歳で急死した。竹槍事件から、ちょうど2年後でもある。彼はその後、いったん復職したものの、その心は生命を閉じるまで、ジャーナリストという職業に戻らなかった。長崎県諫早などに引っ込んだままだった。

戦争が終わり、かつての上司や部下たちは、繰り返して吉岡文六に復帰・復職を懇願する。吉岡の直属の部下で同じ東亜同文書院出身の田中香苗もその一人。東京にいた田中は復帰を促す手紙を、九州にいた吉岡に書いた。届いた返事は簡単なものだった。

「親の心子知らずとはこのことだ。その資格もなければ、そんな意志もない。ただ君の心遣いには感謝する」。ジャーナリストとして無謀な戦争に加担しただけではなく、敗色が濃くなる戦況を伏せ虚偽の報道を続けた自身を責める思い。また、竹槍事件の記事掲載に踏み切ったことで、新聞社を窮地に追い込んだ。そんな自分が戦争は終わったからといって、社に戻ることできょうか。その判断は吉岡にとって自らのけじめなのだろう。

吉岡の死後、妻・千賀は、東林寺境内の別棟の離れにしばらく暮らした。だが、その離れも住職の森によると「昭

和40年7月の大雨で、寺の裏山が崩れ、離れは流れ出た土砂で押しつぶされて倒壊した⁴⁵。1965年7月2日に発生した豪雨は球磨川流域に大水害をもたらし、人吉市内では約1300戸が流失・損壊する被害が出た。寺は球磨川からやや距離があるとはいえ、猛烈な雨が軟弱なシラス台地を襲えば、ひとたまりもない。

吉岡文六は1899（明治32）年9月、熊本県球磨郡人吉町（現在の人吉市）の商家に生まれた。隣県・宮崎県の旧制宮崎中学校を経て1919年、東亜同文書院の入学試験に合格。19歳にして上海へ渡った。吉岡にとつて初めて目にする外国だった。同文書院には第19期生として入り、毎日新聞社に入社するまでの約3年間を上海で過ごす。この異国での体験が、中国専門ジャーナリスト、そして竹槍事件によつて毎日新聞社退職に至つた吉岡の中国観に大きな影響を与える。

吉岡文六はなぜ、海の向こうのこの学校を目指したのだろうか。吉岡が旧制中学生として過ごした5年間（1914-1919年）、中国大陸は混乱を極め、激動の時代でもあった。辛亥革命⁴⁶を経て1912年1月、孫文⁴⁷を初代臨時大統領に中華民国臨時政府が南京で成立、268年間続いた清朝⁴⁸は滅亡した。ただ、もう一人の実力者である第二代臨時大統領、袁世凱⁴⁹は首都を南京から自らの勢力基盤である北京に移し、翌13年10月に正式な大統領に就任した。一方で、

中央の集権に反発する地方軍人（軍閥）は独自に統治を続け、人心と国土は乱れた。

日本の新聞は連日、その動乱の様相を大きく報じていた。さらに14年7月に始まった第一次世界大戦の余波は中国大陸に押し寄せる。中国大陸に食指を伸ばしていた米欧に後れを取るまいと、日本は15年1月、袁世凱に対華二十一条要求⁵⁰を突きつけた。中国国民の反日感情は激化し、排日運動は1919年の「五・四運動」⁵¹となつて北京から全国に広がっていく。

九州の片田舎に住む10代の吉岡文六の関心は中国大陸に向かう。吉岡の関係者へのインタビューや文献の調査を重ねた渋谷敦は自著の中で「その頃の文六は、アメリカやイギリスの政治資本が、中国の混沌と動揺を利用して、盛んに東亜を侵略するとして、しきりに憤慨している。（略）文六が本屋の店頭に立つて、中国に関する書物を、まるで憑かれたように貪り読んでいるのを、人はよくみかけた」と著している。⁵²

広く海外に窓を開いた港町・上海に、東亜同文書院が生まれたのは1901（明治34）年のこと。中国・清朝はアヘン戦争で英国に敗北し、南京条約によつて上海の開港を強いられていた。東亜同文書院はアジア主義を掲げる民間団体、東亜同文会が、当時の日本政府の大陸政策と連動する形で、創設した専門学校（旧制）である。のちに日中戦

争さなかの39（昭和14）年に大学へ昇格した。

東亜同文書院の建学の精神を示した「興学要旨」⁵³が現存する。「中外ノ実学ヲ講ジテ、中日ノ英才ヲ教エ、一二ハ以テ中国富強ノ基ヲ樹テ、一二ハ以テ中日輯協ヲ固ム。期スル所ハ中国ヲ保全シテ、東亜久安ノ策ヲ定メ、宇内永和ノ計ヲ立ツルニ在リ」⁵⁴、つまり「東アジアの志ある人士の責務は、清国の富強の礎を築くことであり、それは先ず日本と清国の協力を土台に固めなければならない。そのため人材の育成を急ぐべし」と日中提携、東亜保全を謳う。

荒尾精⁵⁵は、のちの東亜同文書院につながる日清貿易研究所⁵⁶の設立者である。荒尾は生涯最後の著書『対清弁妄』⁵⁷の中で、日清戦争勝利に酔う日本社会を、「營々汲々トシテ虎呑狼食ノ尤ニ傲ハント欲ス。識者ノ謬妄⁵⁸、亦泰西人ヨリ己甚シカラザル乎⁵⁹」と評した。

歴史家の保阪正康⁶⁰は、荒尾精の警鐘について「アジアを食いちらかそうとする西欧人の野獣のようなまねを、なぜ日本は行うのかと、激しい怒りを示している。領土と賠償を求めるのに躍起となっている日本人は、西欧人と同列ではないかとの指摘だ」⁶¹と論じる。さらに「荒尾は、日本は道義国家としてアジアの一角を占め、西欧帝国主義の覇道に抗議すべきだったとの意見だったのである」⁶²と解説する。日中（清）間の友好協力の基礎固めに必要な人材を養成することによって、東亜同文会の掲げる「支那保全」を实

現しようと生まれた東亜同文書院。ここで学んだ者たちは、その教えに大きな影響を受けた。少年・吉岡文六も例外ではないだろう。

抑えがたい中国への思い。そのタイミングで吉岡文六が知ったのが、大陸への道を開く東亜同文書院の学生募集告知だった。熊本県公費派遣生試験を受けた約200人のうち、吉岡だけが合格した。

卒業後の1922（大正11）年、毎日新聞社でジャーナリストの道を歩む。入社後わずか5カ月後に北京へ赴任、いったん帰国したのちの1932年6月、上海に赴任した。同じ年の1月、第一次上海事変⁶³が勃発していた。2年後の1934年に帰国したが、同文書院時代の2年間を含め、長く中国大陸に駐在、また長期の中国出張を繰り返した。同文書院で学び、後にマスコミに身を投じた者の多くがそうであったように、「中国問題専攻のエキスパート」⁶⁴となっていく。その実績を評価され、昇進を重ね、若くして編集部門の責任者となった。

第一線で取材活動をしていた時の吉岡文六は、どのような記者だったのだろうか。毎日新聞社の国際報道畑では吉岡の同僚だった城戸又一⁶⁵は生前、日本新聞協会が企画したインタビューシリーズで、吉岡について語っている。

——（略）以前は、大陸浪人型の、軍部と非常に近い

関係にあった方のようにも聞いておりますが、どんな方だったんでしょうか。

それが本当ですね。南京特派員として軍と接触するところが多かったというより、むしろある意味では、軍の代弁に近いような特電「引用者注：自社の現地特派員が送稿した記事の略」を盛んに打ってきて吉岡文六という署名入りの特電で、新聞の第一面トップを、それも相当のスペースを取って出しましたが、これは陸軍の対支政策に沿ったものでして、ある意味ではその代弁という性格の電報でした。非常に優遇されたわけですが、それは吉岡自身の考え方もあったと思うんです。（略）新聞記者としての考え方はちゃんと持っていた人だと思えます。だから、新名君の「竹槍事件」の時に、それに対する反発というか、不当なやり方に対する抵抗の姿勢は十分あったと思うんです。⁶⁶

城戸は、吉岡が駐在する中国から「軍の代弁に近い」記事を送り続けていたと証言する。「それは吉岡自身の考え方もあった」ともいう。中国事情に通じ、ある意味、軍部のプロパガンダを担った吉岡は、独自の中国観を有し、中国の将来を開くためには日本の役割の重要性を、さまざまな媒体を通じて訴えてきた。その背景は追って分析したい。反動なのか、戦況の悪化に伴い、軍内部の確執、さら

には戦略・戦術の迷走は、大きな失望につながったことは想像に難くない。それが竹槍事件への決断に至ったと、城戸は推測する。

日本新聞協会の同じインタビューシリーズには、戦前・戦後を通じて日本を代表するジャーナリストだった松本重治⁶⁷も応じている。松本は1930年代の上海勤務時、吉岡文六と同じ時代を過ごした。

——これら「電通」「日本電報通信社の略称：引用者注」および新聞社との競争関係はいかがでしたでしょうか。競争は非常に激甚でした。

——なかんずく、どこと……。
それは「電通」です。それからすばらしかったのは「毎日」の吉岡文六君です。ほくが、これは今、陸軍武官に会う必要があると思っけて行くんですね、たいがい「毎日」が来てるんですよ。よくやるなあ、と感心したですよ。吉岡君は英語はあんまりやらない。かれは中国語ですから……。

——松本さんが上海においてになったおりの、各新聞社の支局長は、「毎日新聞」が吉岡文六さん、「朝日新聞」が木下猛さん、「読売」が田中幸利さん。このなかではやはり吉岡さんの活動が非常に目立った。そりゃ、だんぜん。⁶⁸



【図7】見つかった「検閲週報」『新聞研究』第282号から

城戸又一による吉岡文六評同様、松本重治も吉岡が軍部中枢に食い込み、情報を得る術を持っていたことを記憶していた。堪能な中国語力、中国事情や中国人の気質に関する知識の源泉は、東亜同文書院に端を発する。インタビュア当時、すでに他界していた吉岡への敬意があつたとしても、自身がスクープ記者だつた松本がこれほど高く評価するのは、吉岡が極めて優秀な記者であつた裏付けでもある。

竹槍事件が起きた戦争末期に時代を戻す。陸軍報道部長が、『毎日新聞』の編集責任者を面罵し、廃刊をちらつかせるほどの当時の言論統制を、新聞社側はどう受け止めていたのだろうか。

当時、新聞記事の原稿は掲載前、大本営をはじめ、しかるべき機関に示し、彼らの指導（検閲）を受けていた。物資不足から、新聞用紙はすでに配給制になっていた。当局が新聞社への用紙提供を止めさえすれば、いとも簡単に休刊・廃刊に追い込める。新聞社側は用紙の差し止めにならぬよう、薄水を踏む思いの日々だつた。戦後、軍によるメディア統制に関するさまざまな資料が発見されてきた。その中でも毎日新聞横浜支局で見つかった資料からは、検閲を強いられた新聞社側の対応が浮かび上がる。

その詳細を東洋大学教授、田中菊次郎が検証している。田中は『新聞研究』1975年1月号で、「戦時情報局の役割——発見された毎日新聞『検閲週報』の証言から」のタイトルで紹介、同号から3回連載する形で『検閲週報』の内容を詳説した。⁶⁹ なお、戦時情報局とは、内閣に置かれた情報局を指す。

このころ、新聞各社には検閲部という部門があつた。毎日新聞検閲部は全国の取材網へ検閲情報、対応策を伝えるため『検閲週報』を作成した。終戦とともに、そのほとんどが処分されたはずだったが、同社横浜支局が1973年春、新しい事務所への引っ越し作業中に偶然、発見された。表紙に朱印で「極秘」と押された『検閲週報』は、ワラ半紙にタイプ印刷されている。見つかった綴りは計632頁。1942年8月から翌43年11月に及ぶ。この発行時期



飯田 和郎（いいた・かずお）氏

1960年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、1983年毎日新聞社入社。佐賀支局、西部本社報道部を経て91年に東京本社外信部。北京特派員、台北支局長、中国総局長（北京）、外信部長など。2013年RKB毎日放送（本社・福岡市）に移り、報道制作センター長、専務取締役などを務めたのち23年に退職。在職中から福岡市の西南学院大学院国際文化研究科修士課程に通い、本稿を修士論文として提出（『アジア時報』用に改題）、24年3月修了した。一般社団法人アジア調査会理事。

はミッドウエー海戦⁷⁰での日本の大敗の後、すなわち戦局の転換期に当たる。圧倒的な米軍の戦力を前に、日本軍の戦況は、太平洋ではガダルカナル撤退から前述のアッツ島全滅へとさらに悪化していく。竹槍事件の記事のとおりだ。一方の欧州・ソ連戦線ではスターリングラードでドイツが敗北し、形勢は連合国軍へ完全に傾いていた。国内では、日中戦争後に施行された国家総動員法⁷¹が「41年3月大幅な改正が行われて罰則なども強化された。太平洋戦争に突入すると、その適用は拡大され、国民生活を全面的に拘束した」⁷²。

田中菊次郎は「こうした時期に、戦時情報局が何を考え、新聞に何を求め、新聞がどうこれにどう対応したかを、『検閲週報』は事細かに記録し、かつ語っている」と、横浜支局の倉庫に眠っていたワラ半紙の綴りを意義付ける。

『検閲週報』には、最初に「時局と検閲について」と題した検閲部長、北条清一の一文がある。1941年12月の「大東亜戦争開戦以来、特に検閲が嚴重になつて、新聞紙面に現れる過半数の記事は、検閲当局の眼を通つたものである。従つて新聞紙における検閲の仕事も、非常に重要性を持ち、検閲部員は火薬工場に働いているような気持ちで、責任の重大さを痛感している」と、北条は担当部門の責任者としての心情を吐露した。火の管理を誤れば、一瞬にして爆発してしまう「火薬工場で働くような気持ちの検閲部員」の緊張感が伝わってくる。

いったん差し止め事項に違反した場合は、たちまち新聞の発売禁止となり、記述が軍関係の場合は新聞社内関係者が起訴される。北条清一の文章はこう結んでいる。

「そのほか物資不足とか配給不円滑に対する非難の記事とか、あるいは時局に対する不平、不満の記事、政府や地方当局者の措置に対する非難の記事、また時局犠牲者の窮状を刺激的に扱ふというようなことは、すべてご遠慮願つた方がよいと思う」⁷⁵。検閲部としては、当局とのトラブルを避け、新聞発行を途切れさせない。北条清一の社内への

呼びかけはある意味、当然の要請である。

「自粛・自衛」するメディア。『朝日新聞』で主筆を務めた緒方竹虎は軍部に批判的な考えを持つていたことで知られる。その緒方であれ、「満洲事変で軍が非常に政治的な力を發揮するようになってからは、これは丸腰の新聞では結局抵抗は出来ない。(略)それよりもこれは何とか一つ朝日新聞が生きて行かなければならないという意識の方が強くなり」とのちに述懐している。こちらの回顧からも、組織を維持することを何よりも最優先していた新聞社幹部の心境がにじむ。

田中菊次郎は、『新聞研究』誌上で行った3回連続の検証の最終回で、「新聞は次第に内外に信用されなくなった。情報局を意のままに操った軍部が、新聞をも私物化したとき、新聞はもはや『死に体』となっていたのである」と総括した。だが、田中は一方で「編集局各部分はこれを、そのまま肯定したわけではなかった。あるときは「がんじがらめ」の網の目をくぐり抜ける工夫もあり、あるときは「竹やり事件」のように戦局指導批判に決然と立ち上がったのを見て、そのことは明らかである」と評価している。

網の目をくぐり抜け、竹槍事件の記事が掲載できたのは、筆者の新名丈夫が海軍内にある記者クラブ、黒潮会所属だったからに過ぎない。中でも、「黒潮会詰めの各社の記者のうち、主任クラスの者の記事は、慣例的に検閲を必要

としていなかった」⁸⁰。いかなる事前検閲も受けないうべたらんだったからだ。

しかし、北条清一のいう「政府や地方当局者の措置に対する非難の記事」が網の目をくぐり抜けて報道されても、そこには軍部からの強烈な制裁が待っている。それでも掲載に出したゴーサインは、吉岡文六の決意の固さを示したと言える。

竹槍事件の余波は、無関係の多くの人命をも奪ったと言えるかもしれない。怒りの収まらない陸軍は、記事の筆者を割り出し、新名丈夫を一兵卒として召集した。すでに37歳。軍による懲罰的意味を持つ召集だった。ただ、陸軍は新名1人を召集するわけにはいかず、本来は該当しないはずの兵役免除者250人を合わせて召集した。新名は3カ月後、海軍の計らいによって従軍記者になることで除隊できたが、道連れのように召集された250人は全員、硫黄島⁸¹で玉碎した。戦場で命を落とした者たちの命運も含めた全体を竹槍事件と称していいだろう。

42 2023年11月7日、論者が東林寺で行った森無禪へのインタビューから。

43 1904年1985年、香川県生まれ。毎日新聞社で主筆、社長、会長などを歴任したほか、東亜国内航空会長なども務めた。田中香苗に

については第2章、第3章で詳しく取り上げる。

44 田中香苗「吉岡文六さん」(『回顧 田中香苗』田中香苗回顧録刊行会、1987年8月) 153頁。

45 前掲、森無禪へのインタビューから。

46 1911年、辛亥の年に中国に起こった革命。10月10日の武昌蜂起をきっかけに各地で革命派が蜂起、翌12年1月、南京に孫文を臨時大統領とする臨時政府を樹立、2月の清帝退位によって中国史上初の共和国である中華民国が成立した。

47 1866-1925年、中国革命の指導者・政治家。広東出身。初め医師となったが、革命運動に入り、1894年興中会を組織、1905年、東京で中国革命同盟会を結成し、三民主を綱領とした。辛亥革命で臨時大統領に就任後、政権を袁世凱に譲ったが、その独裁化に抗して第二革命を開始。19年、中華革命党を中国国民党と改組、24年、国共合作を実現し、革命推進のため広東から北京に入ったが病死した。亡命の日本で多くの日本人が物心両面で孫文を支援した。

48 中国最後の王朝。1616年、女真族のヌルハチ(太祖)が明を滅ぼし、国号を後金として建国。1636年、2代太宗が国号を清と改称。都を瀋陽から北京に移した。康熙、乾隆兩帝のとき全盛。19世紀に入ってから列強の侵略や、太平天国などの農民反乱により衰退。1912年、辛亥革命によって滅亡した。

49 1859-1916年、中国の政治家。河南省出身。天津で洋式の新建陸軍を編成。辛亥革命後、中華民國大統領に就任。在任は1913-1915年。次第に独裁色を強め、帝政を実施しようとしたが、反袁

運動のため失敗。

50 第一次世界大戦中の1915年、日本が権益拡大のため中国に提出・受諾させた21カ条から成る要求。関東州租借期限・南滿州権益期限の延長、南滿州・東部内蒙古における日本の優越性の確立、中国沿岸の港湾・諸島の他列強国に対する割譲・貸与の禁止などが含まれる。

51 1919年5月4日、北京の学生たちのデモを契機として起こった中国の民族運動。第一次世界大戦中の日本の中国侵略や、これを許した軍閥政府に反対するため、各地でストライキや日貨(日本商品)の排斥が頻発した。

52 洪谷敦『無冠の帝王——ある新聞人の生涯』(清風出版、1968年1月) 65頁。

53 「興学要旨」(『創立東亜同文書院要領』、東亜同文会、1901年、月は不明)

54 原文は漢文で当該箇所は以下。「講中外之実学。教中日之英才。一以樹中国富强之基。一以固中日輯協之根。所期在乎保全中国。而定東亜久安之策。立字内永和之計。」

55 1859-1896年、尾張藩藩士の家に生まれる。明治時代の軍人、中国問題研究家。陸軍士官学校卒業後、隊付将校を経て参謀本部に勤務。中国問題に関心を抱き興亜論を唱え、1886年、清国に渡り、3年余り各地を実地調査した。日清貿易の振興を目ざし、上海に日清貿易研究所を設立して人材養成にあたった。

56 1890年から1893年にかけて上海に存在した日本の教育機関。日清戦争勃発により閉鎖される。

- 57 荒尾精『対清弁妄』（大谷仁兵衛・山中勘次郎・下村米吉、1895年3月）。
- 58 1984-1985年に朝鮮の支配権をめぐる日本と清国との間で起こった戦争。朝鮮で起こった甲午農民戦争鎮圧のため清国が出兵すると、対抗して日本も出兵。日本は勝利を取め、下関講和条約を結んだ。
- 59 前掲、荒尾精『対清弁妄』序。
- 60 1939年、北海道生まれ。ノンフィクション作家・評論家。「昭和史を語り継ぐ会」を主宰。主に日本近代史の事象、事件、人物に題材を求め、延べ4000人余の人物とに聞き書きを行い、ノンフィクション、評論、評伝などの分野の作品を発表している。
- 61 保阪正康「昭和史のかたち——明治人・荒尾精の教え」（『毎日新聞』、2015年5月9日朝刊）9頁。
- 62 同前、9頁。
- 63 1931年9月、中国東北部・奉天（現在の瀋陽）で起きた満州事変への国際的な目をそらすため、日本軍が上海に進撃し、全市を占領した事件。日中戦争をさらに拡大させるきっかけとなった。
- 64 前掲、本田毅彦「海外経験を持つメディア議員たち——東亜同文書院卒業者を中心として」279頁。
- 65 1902年-1997年、福岡県生まれ。毎日新聞特派員としては主に欧州で活動した。のちに東京大学や同志社大学の教授に転じた。日本新聞学会会長なども務めた。
- 66 城戸又一「大戦前、激戦の欧州を伝える」（『新聞研究 別冊 第24号 聴き取りでつづる新聞史』、日本新聞協会、1988年10月）58頁。
- 67 1899-1989年、大阪府生まれ。1933年に「日本新聞聯合社」（のちの同盟通信社、現在の共同通信）に入社し、上海支局長として赴任。中国の要人・ジャーナリストらとの独自のネットワークを持ち、蒋介石が軟禁された西安事件をスクープしたことも知られる。上海での6年間の回想録を『上海時代』（中公新書）に著した。戦後は財団法人・国際文化会館を設立し、自ら理事長に就いた。
- 68 松本重治「稀有な国際ジャーナリスト」（『新聞研究 別冊 第12号 聴き取りでつづる新聞史』、日本新聞協会、1981年5月）25頁。
- 69 田中菊次郎「毎日新聞「検閲週報」（昭和十七〜十八年）の証言（上）」（『新聞研究』、1975年1月通巻282号）62-66頁▽「毎日新聞「検閲週報」（昭和十七〜十八年）の証言（中）」（『新聞研究』、1975年2月通巻283号）69-73頁▽「毎日新聞「検閲週報」（昭和十七〜十八年）の証言（下）」（『新聞研究』、1975年3月通巻284号）77-81頁。
- 70 太平洋戦争中の1942年6月5日から7日にかけて、ハワイ諸島北西にあるミッドウェー沖で、日米両海軍の機動部隊が繰り広げた大規模な戦闘。日本の連合艦隊は空母4隻をすべて失う大敗を喫し、戦局が大きく転換した。
- 71 日中戦争に際し、国家の総力を發揮させるために人的、物的資源を統制・運用する権限を政府に与えた法律。1938年に制定、敗戦後の1945年廃止された。
- 72 『日本大百科全書』（ニッポニカ）の長幸男「国家総動員法」より。
- 73 田中菊次郎「戦時情報局の役割——発見された毎日新聞「検閲週報」の証言から」（『新聞研究』第282号、日本新聞協会、1975年1月）

- 60頁。
- 74 田中菊次郎「戦時情報局の役割——発見された毎日新聞「検閲週報」の証言から」（『新聞研究』第282号、日本新聞協会、1975年1月）61頁。
- 75 同前、61頁。
- 76 1888-1956年、山形県生まれ。朝日新聞社副社長・主筆など要職を経たのち政界に入る。第二次世界大戦後は自由党に参加、第四、五次吉田内閣の副総理を経て自由党総裁を務めた。
- 77 緒方竹虎「叛乱将校との対決の一瞬」（『五十人の新聞人』、電通、1955年7月）207頁。
- 78 前掲、田中菊次郎「毎日新聞「検閲週報」（昭和十七、十八年）の証言（下）」（『新聞研究』第284号）81頁。
- 79 前掲、「戦時情報局の役割——発見された毎日新聞「検閲週報」の証言から」（『新聞研究』第282号）61頁。
- 80 前掲、戸川幸夫「東条と闘った七人の侍」（『昭和快人録——知られざる戦史』）112頁。
- 81 東京都・小笠原諸島に属する。太平洋戦争の末期、米軍はB-29爆撃機による日本本土空襲の中継基地として、また戦闘機隊の出撃基地とするため同島の攻略を企図した。米軍は1945年2月16日同島に対する艦砲射撃、海兵師団の上陸を開始。約2万3000人の日本軍守備隊は、徹底した陣地持久戦によって抵抗したが、圧倒的な砲撃に支えられた米軍の猛攻によって、3月末には日本軍の抵抗は終わりを告げた。